

〈論文〉

ビーダーマイヤー的精神分析 女家庭教師ルーシー・Rの困窮とフロイトのブルジョア的解釈 をめぐって

松本 由起子

本論では、近代ブルジョア家庭における女性の位置付けを、女家庭教師という観点から社会経済的に捉え、その位置付けを前提に、フロイトの『ヒステリー入門』に登場するルーシー・Rの症例を検討することで、フロイトの分析がどういう機能をもっていたか再考する。

近代ブルジョア的「家」の成立

産業革命以前の西洋では、家族はビジネスのユニットでもあり、婚姻関係は経済的取り決めが主眼となることが多く、妻もビジネス要員であった。産業革命以降も労働者階級ではそれが続く。しかし中産階級では、職場と家庭の分離がそのまま男女の領域の分化と重ねられ、男が外で働き、女は妻=母として家に留まって外界からのシェルターとしての家を守るという体制に入る。そして19世紀が進むと、妻を養っていること、妻が専業主婦であることが中産階級のステータスシンボルになり、中産階級なら、経済的にその下端に位置していても最低一人は使用人を置くものなどと、ブルジョア家庭の妻は肉体労働的な家事から可能なかぎり遠ざかって、本質的にやるべきことは生殖、あとは家庭に安らぎを紡ぎ出すことを使命とされるようになった。

このような妻は「家庭の天使」と呼ばれた。「家」は、外界から切り離された避難所とみなされ、妻子の「無垢」をかかげる一種の聖域になったのである。家庭の天使たる妻は、外界から無垢で安らかな空間を守る。それは外界を動かす市場原理に冒されていない、女性的「愛情」によって包まれた空間であるべきだった。今日的な、愛情に基づくものとしての夫婦関係、愛の空間としての「家」が近代ブルジョア階級のものとして生まれたのである。

そこでは花も花柄も豊かに成長し、ガス灯の排気にもめげず、室内で植物が繁茂する(図1, 図2)。ドメスティケイトされた自然、生殖するものとしての女性のイメージが室内を満たす一方、カーテンは軽やかなモスリンから(図3)、たっぷりと贅をとった重く厚

いベルベットなどによってゆき(図4)、外界から切り離され、守られた空間としての「うち」を深く包みこむようになっていく。



図1 Sotira, *The New Living Room at Pavlino*, 1838

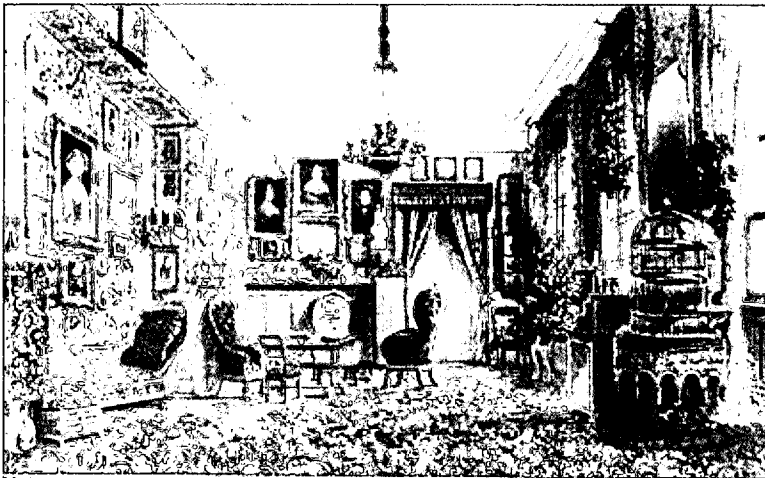
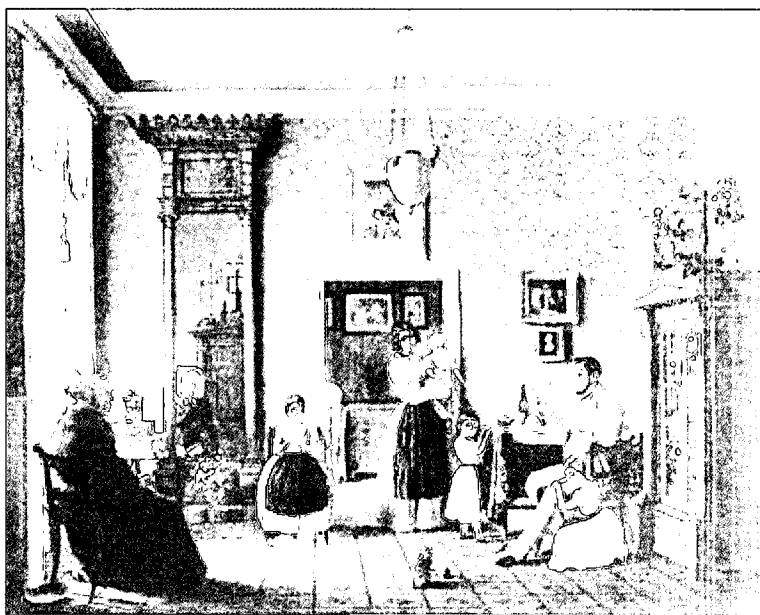


図2 P. F. Peters, *Drawing Room at Kirchheim*, 1857



227) E. Gärtner, *Living Room of the Master Smith*, E. F. A. Henschke, in *Stichwerk* Verlag, Berlin. SKANSKIVETS MUSEUM, ÖREBRO.

図 3 E. Gärtner, *Living Room of the Master Smith*, c1830

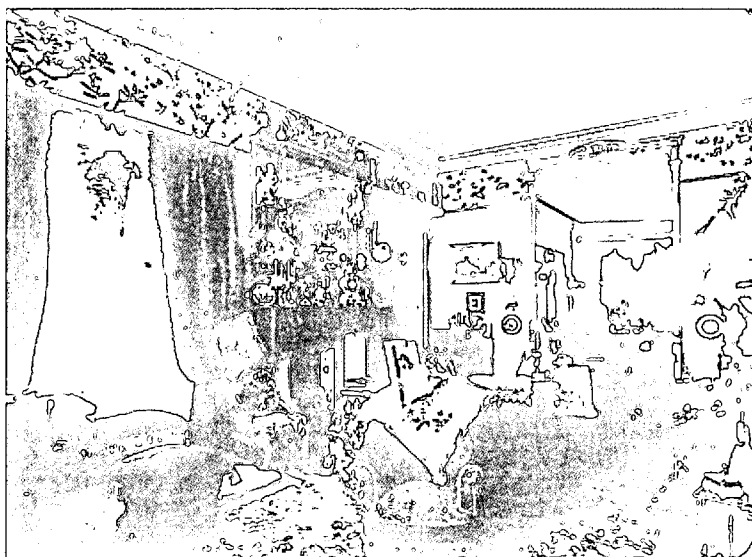


図 4 *The drawing room of an unidentified Scottish house*, c1890

経済と「愛」がブルジョア家庭で結びつく

この流れは、展開に差こそあれ、産業化された西欧諸国には共通して見られたものである。ナポレオン戦争後のウィーン会議の頃から1848年の五月革命頃まで、ウィーンを中心に展開されたビーダーマイヤー様式は、ドイツ語圏で中産階級の主婦が肉体労働から遠ざかり「天使」化した時期の家庭のあり方を様式化したとも言えるものだ。

工芸、特に家具で知られるこの様式は、もともと家具の生産地であったウィーンで、工業化や政府による産業保護を背景に展開したが、その際、主要な工房は、価格を抑えた実用的な既製品（図5）を店頭やカタログで販売するという、中産階級をターゲットにしたマーケティングでスタイルを浸透させていった。上流階級向けの注文製作が流行を規定していたそれまでとはまったく異なる展開であり、貴族階級までもが驚くべきはやさでこのスタイルを受け入れたことで、ビーダーマイヤー様式はブルジョア主導の最初の装飾様式となる。

この様式は、広い意味での新古典主義に属す。しかし、新古典主義のギリシャ・ローマの要素はブルジョア家庭の居間サイズへと縮小され（図6）、劇的に拡大・単純化されたロココの装飾要素が構造に取り込まれたかたちで使われる（図7）など、ブルジョア家庭のサイズや財布に合わせて既存の様式の要素が拡大・縮小され、バランス重視で単純化されている。テーブルを囲んでソファやアームチェアを配した団欒コーナーや、記念品・土産物愛好など、親密、日常、感傷、家族といった言葉に結び付けられる特徴も示すその様式は、凡庸、小市民的と愚弄されるのだが、スケールとコストを抑えた商品化が家

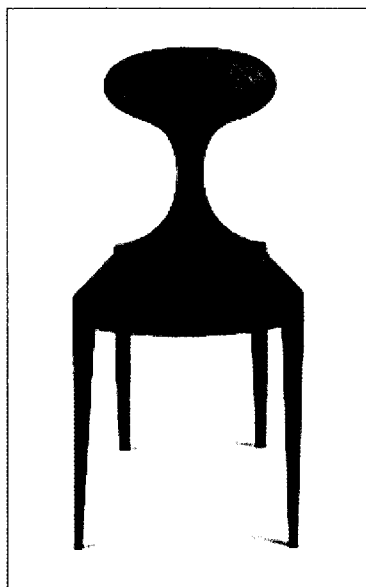


図5 Bohemia, c1820

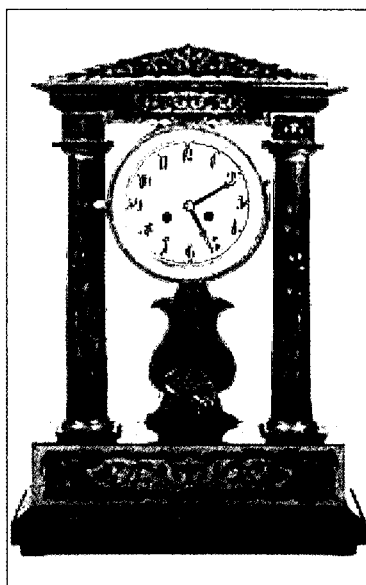


図6 Vienna, c1830

族愛や親密さに繋がったところが、ブルジョア文化の新しさであり、その核でもあった。経済的配慮と「愛」が、近代ブルジョア家庭において「様式」として結びついたのである。

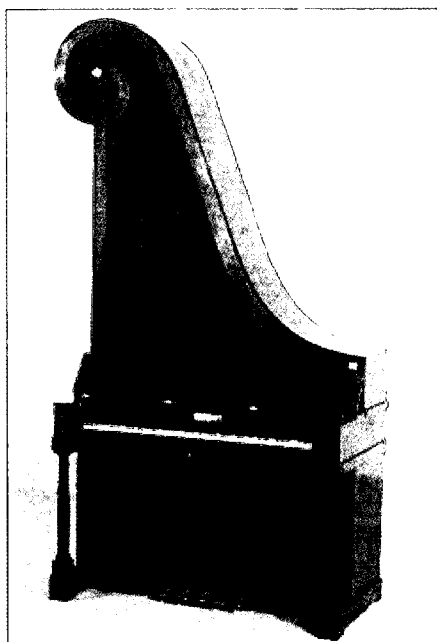


図7 Giraffe Piano, Hannover, c1820-30

女家庭教師の不安

中産階級の家には子供部屋が出現したのはこの頃だった。すると、それまで貴族の家で見られなかった家庭教師も姿を現す。その際、男の家庭教師が少年にギリシャ語、ラテン語、数学など、いわゆる専門教育を行ったのに対して、女の家庭教師は少女に礼儀作法や読み書き、外国語会話、ダンスや音楽などの初歩的教育を行った。これは社会に出て働くことになる少年と、家庭の天使として生涯働いてはならない少女とで、教育内容が明確に分かれたことの反映であり、中産階級の娘が「妻=母」以外のものにならないように育てられる環境が整ったということでもある。

19世紀前半、娘たちに家庭教師をつけるまでに中産階級の経済力が向上した一方で、市場にのまれて富を失う中産階級も少なくなかった。家庭の天使として働かない女になるべく教育を受けてきた娘が、突如なり徐々になり経済的困窮に見舞われて、自ら生計を立てねばならなくなるといった事態も増えた。が、専業主婦以外になるべきではないとされた中産階級女性が、階級的尊厳を失うことなく自活することは、論理的に不可能である。

その、ほとんど唯一の抜け道が家庭教師になることであった。ブルジョア的「家庭」は、市場経済の価値体系から切り離された「愛」に基づく空間として設定されている。したがって、たとえ他家においてであれ、そのような「家庭」で女がなすべき子育てに従事するのであれば、「外」に出て金のために働く女に身を落とし、ブルジョアの倫理を踏み外したということにはかろうじてならない――と言えなくもない。そういう抜け道である。

とはいえ、ブルジョア家庭の未婚の娘ならば、家族や教会関係者以外の男と同席する際にはシャペロンがつくという時代である。ブルジョアの親であれば、経済的に逼迫しても、娘が家を出て家庭教師として働くことに対しては、それだけはやめてくれと言うものだった。聖域たる「家」を離れ、他家で雇用関係に入った娘の結婚市場での価値は決定的かつ不可逆的に低下したのである。

ルーシー・R 症例

1895年、フロイトはヨーゼフ・ブロイアーとの共著で『ヒステリー研究』を出版した。ここに、ルーシー・Rという、ウィーンの新開地の、ある工場経営者の家で家庭教師として暮らすイギリス女性が登場する。

彼女はふさぎ込み、疲労し、主観的な匂いの感覚に苦しんでいた。さらに、ヒステリー症状として、触覚は損なわれていないのに、かなりはっきりとした全身の痛覚焼失を示すという症状が見られた。（『ヒステリー研究・上』金関猛訳、ちくま学芸文庫 174頁）

問題の匂いは、焦げたケーキの匂いだった。フロイトはそれがトラウマ的状况にあって実際に嗅いだ匂いだと推測する。そしてルーシー・Rはそのシーンを思い出すことができた。自分の誕生日の二日前、子供たちと勉強部屋で料理ごっこをしていたとき、実母からの手紙が届いた。読もうとすると子供たちが、お祝いの手紙だろうから今読んでほめと行ってとりあげた。その騒ぎの最中に、焼いていたケーキが焦げたのである。

この頃、ルーシー・Rは宙ぶらりんの状態にあった。「家政婦も料理女もフランス人の女性も、私が自分の身分を鼻にかけていると思っているらし」く、つまらない意地悪をされるうえに、あることないこと告げ口され、雇い主に相談しても思ったような支えにはなってくれず、もう辞めたいと申し出たところ、決断する前に二週間よく考えてみたほうがいいと言われたという時期だったのだ。フロイトは「子供たちへの愛着や家政にかかわる他

の使用人への神経質な態度を考えあわせるならば、そうしたことすべてからはただ一つの解釈しか出てこなかった。私は勇気を奮って女性患者に子の解釈を伝えることにした」と、次のように切り出す。

わたしの推測ですが、むしろあなたは雇主である社長さんに恋をされているのでしょうか。もしかすると、あなた自身そのことは御存じないのかもしれませんが。でも、あなたは、実際、自分が子供達の母親の位地につけるのではないかという望みを育てられているではありませんか？（同 192 頁）

やがてルーシー・Rにまわりつくケーキの匂いには葉巻の匂いが混ざりはじめる。そしてフロイトは、焦げたケーキのシーンが、ひとつの記憶を仲介にして、あるトラウマ的な出来事に連なっていることを突き止める。それは、ルーシー・Rが密かに思いを寄せる雇い主との関係に望みがないことを自覚したシーンであった。

家庭教師の社会経済的状况からルーシー・Rを見る

イギリス、グラスゴーの出身で、ウイーンのビジネスマンの家庭で家庭教師をしているルーシー・Rは、そうなった事情を、雇主が遠縁であり、その妻が亡くなる際に子供たちの面倒を見ると約束したからだとフロイトに説明している。しかし当時の家庭教師の社会的地位思えば、止むに止まれぬ理由がなければ、ブルジョアの娘が家庭教師になろうとはしないはずで、父親を失っているルーシー・Rの場合も、経済的困窮という決定的な理由が先にあったと考えるのが妥当である。つまり、責任感と愛情による職業選択だという説明は、嘘ではないまでも、多分に隠ぺい的なものと見なくてはならない。

当時の家庭教師のあいだには、金銭授受をともなう契約関係にあることに触れたがらない傾向が広く見られたという。働かない女であるべき中流階級の尊厳を保つには、家庭教師という仕事も、金銭に基づく契約関係によってではなく、愛と責任によるものでなくてはならなかったからである。家庭教師は、小間使や料理人より給料が低くても、さらには給料の支払いが滞っても、不満を訴えないことが多かった。そしてしばしばそれが悪用されたと言われている。

その背景には、ブルジョア家庭が19世紀が進むにつれて「うち」で金の話をするのを嫌うようになったことがある。もちろん、多くの小説で生々しく描かれているように、い

ざ結婚となれば、これこれの年金付きの娘なのだからこの程度の地位や収入のある男はねらえるはずだとか、家柄はそこそこだが、持参金が0では話にならない等々、具体的な数字がとびかう詳細な金勘定がさかんになされた。ところがその一方で、たとえば、娘は自分の嫁入り道具にかかる費用を知ってはならなかった。ドイツ語圏では、19世紀、クリスマスの贈り物の運搬者としてクリストキントとサンタクロースが二手に分かれて席卷するが、これも、家計を支える父親からではなく、神話・宗教的存在からの贈り物とすることで、家庭内での金銭的関係を曖昧にする必要が生じたからだと言われている。また、フランス19世紀末のブルジョア女性に関する研究によれば、家庭において儉約という観念は当時もあり、美德とみなされてもいたが、それが実質的な経済効率に結びつく必要はなく、夫たちはむしろ妻の経済観念のなさを「女らしさ」として評価したという。19世紀前半には、ブルジョア階級であっても、妻の商才を評価する部分があった。ところが世紀末に近付くにつれて、経済的配慮が「愛」や親密さへと翻訳されるビーダーマイヤーの動きに沿って、天使の守る「家」は、金勘定を隠蔽するようになったのである。

さて、1892年の末、フロイトを訪ねたルーシー・Rは30才だった。当時、女家庭教師は、理想的には25才から30才までとされ、35を過ぎれば雇用のチャンスは減り、40代に入ると、たとえ職があっても給与が下がりはじめた。雇用期間は、基本的に子供が大きくなるまでであり、たとえば娘が6人いる家庭にずっと勤めたとして15年かそこらである。大貴族が子供の成人後も家庭教師を終身で家に置いておくケースはあったが、中産階級では子供が家庭教師を必要としなくなれば、紹介状と別れの言葉で関係が終わるのが普通であった。

ルーシー・Rの故国イギリスでは、19世紀前半、家庭教師の需要が伸びた。が、家庭教師の身の上に転落する娘の数はそれを上回る伸びを見せ、1840年代にはすでに家庭教師市場は余剰を抱えるようになっていた。19世紀後半、料理人や小間使いなど、他の女の家事使用人が順調に給与を伸ばし、ゆっくりとではあれ確実に経済的地位を向上させていったのに対し、女家庭教師の地位は、余剰のせいもあれば、彼女らに特有の、金銭授受を伴う雇用関係にあることを認めたがらない傾向もあって、向上から取り残されることになる。ウィーンの工場主の元で働く30歳のルーシー・Rは、そういう時代の経済的弱者である家庭教師として、職業人生が下り坂にさしかかる年齢にあったわけである。

当時の女家庭教師採用基準は、「なにを知っているかではなく、どんな人であるか」だった。重んじられたのは教育程度や教育にあたっての技術ではなく、父方・母方の社会的地位や、階級に強く結びつくアクセントなどであった。家庭教師の行すべき教育が専門家としてのそれではなく、育ちの良い主婦であるべき母親の代行だったからである。実際、家

庭教師は、淑女の役回りとして、雇主夫婦が旅行に出れば主婦代行として留守をあずかり、もし主婦が死ねば、代理で子供の教育を行った。ルーシー・Rの雇主の妻は亡くなっていた。その妻が亡くなる際、子供の面倒は見ると約束したから家庭教師になったと説明するルーシー・Rは、家庭教師になることによって、雇い主の妻の代行者の機能をすでに果たしているのである。

ルーシー・R 症例再解釈

こうした状況と30歳という年齢を考えあわせると、先行き不安と表裏一体で、雇主との結婚願望が生まれるのはほぼ必然と言うべきではないか。『ジェイン・エア』、『虚栄の市』、『ねじの回転』、『サウンド・オブ・ミュージック』等々、家庭教師と雇主のロマンスは多くの作品のテーマになっている。ルーシー・Rの場合も、家庭教師と雇主の結婚という、多くの小説が繰り返し語った夢を、当然、思い描いたはずである。また、ルーシー・R周辺の「家政にかかわる他の使用人」も、その可能性を考えずにはいなかったはずだ。しかし、現実には雇主と家庭教師の結婚は少なかった。娘がひとたび家庭教師になれば、結婚市場での価値は決定的に下がる。家庭教師との結婚は、ブルジョア階級にとって明白に避けるべきものだった。世紀半ばに書かれた『虚栄の市』にも次のような発言がある。

あその一家はあんな女を抜きにしたって、身分は充分低いんだよ。だから家庭教師も結構だろうさ。でもぼくは自分の義理の姉になる人は淑女であってほしいんだ。(『虚栄の市(一)』中島賢二訳、岩波文庫154頁)

つまり、そういう凡庸な結婚願望を抱くことが半ば必然であったと同時に、その実現可能性が低いことは、当時なら本人も含めて誰もがわかっていたはずなのだ。とすれば、その願望が打ち消されたからといってヒステリー症状を出すほどのショックでありえたとは考えにくい。むしろ、ルーシー・Rはなぜそこで、いまさらながら大きなショックを受けたのかと考えなくてはならないだろう。

この結婚願望の挫折は、求婚を退けられたといったあからさまなかたちではなく、状況的に当然抱くはずの願望が、やはり現実になるものではないと意識化されたといったゆるやかなかたちでの挫折である。フロイトは、幻臭を手がかりに、次のシーンを発掘した。雇い主宅での食事に招かれた会社の会計係の「ご老人」が、子供たちにキスしようとした

ので雇い主が怒鳴りつけたというシーンである。ルーシー・Rの鼻についてはなれないケーキの焦げた匂いに混ざりはじめていたのは、このとき彼らが吸っていた葉巻の匂いだった。この出来事は、さらに別の女性訪問客が、子供たちの口にキスをするのを許したといって雇い主に怒られたという、別の事件に連なっていた。ルーシー・Rは雇い主が自分に特別な感情など抱いていないと、そのとき確信したのだという。

だが、この確信は、繰り返し述べてきたように、当時の家庭教師ならばおそらく大半が不可避免的に抱かざるをえなかったごく一般的なもので、むしろ、そこからルーシー・Rが幻臭という個別的な症状を発したということ、そしてその際に連想の接点として、会計係の老人が叱りつけられるシーン（「ご老人をあんなふうには叱りつけるなんて、やっぱりよくないことですわ」同198頁）が出てくることに注目すべきではないか。すなわち、月並みなものである家庭教師の結婚願望の挫折が、ルーシー・Rにとって症状を発するほどの意味を持ちえたのは、それが経済と年齢をめぐる現実的困難にかかわるからだったと考えるべきではないか。

ルーシー・Rの実家の経済状況についての情報はない。が、当時、娘が家庭教師になった家庭に余裕があったとは常識的にまず考えられない。ルーシー・Rは結婚願望の挫折による痛手というよりも、その挫折によって直面せざるを得なくなった経済的不安によって恐慌をきたしているのであり、だからこそ幻臭という症状化への過程で、老いた会計係の受難が連想の接点となった。それは、現在、百年に一度ともいわれる不況の中、非正規雇用率の高い女性が専業主婦志向を強め「婚活」に走る状況を見ても想像に難くないどころか、むしろ生々しく共感できる心の動きである。いや、むしろ、ルーシー・Rはそもそも現実に可能性の高い将来の経済的困窮に目を向けるのが怖いがために、それに直面するのを引き延ばすべく、現実には可能性が低いとわかっているながら結婚願望にしがみついていた、そしてそのしがみつきが断たれ、否応なく困窮の可能性に直面することになったとき、症状への逃避が、懸命に性愛的方向に向かってなされたと思われたいと読むべきケースだと思う。

フロイトのブルジョア性

家庭教師をしている事情を金銭的なものとは言わず、責任感と愛だと言うルーシー・Rは、家族と愛のため存在し、金には疎くあるべきブルジョア階級の女としてふるまっている。そしてブルジョア階級の女であり続けるために、将来的な困難に直面してなお、経済的問題に言及することなく、結婚願望を挫かれたという、家と愛情に関わる問題として解

積されうる症状を出す。ルーシー・Rは、ヒステリーになることによって、かろうじてブルジョア女性の地位を維持することに成功しているのである。

ここでもう一度、雇主との恋という解釈を切り出すフロイトを見てみよう。

わたしの推測ですが、むしろあなたは雇主である社長さんに恋をされているのでしょうか。もしかすると、あなた自身そのことは御存じないのかもしれませんが。でも、あなたは、実際、自分が子供達の母親の位地につけるのではないかという望みを育てられているのではありませんか？

フロイトは、このおよそ自明の、そしてきわめて経済的要素の強い結婚願望を、持って回った口調で、まさしくビーダーマイヤー式に「恋」と呼ぶことで、ルーシー・Rのヒステリーに率先して手を貸している。この30歳の女性を、ブルジョア階級から落伍しかけた経済的困窮者予備軍とみなすことをよしとせず、結婚願望の挫折というブルジョア女性らしい家庭と愛の物語へと、ヒステリーへと誘導しているのである。まるで経済的困窮に直面した中産階級落伍者にしてしまうよりは、愛に破れた中産階級としてヒステリーにすべきだともいうように。こうしてブルジョア女性でいられるかどうかの瀬戸際に立たされたルーシー・Rに手を差し伸べるフロイトは、精神分析という語りの中で、ブルジョアの家庭とその構成員をエロス化することによって、ブルジョア性を守っていると言ってもよい。それは、経済的配慮を愛へと翻訳するビーダーマイヤー文化に着実につらなる、ブルジョア的身振りなのである。

この論文は、平成21年度札幌大学研究助成を受けておこなった研究の一部である。

[図版出典]

- 図 1-3 : Praz, Mario, Weaver, William (訳) , An Illustrated History of Furnishing, George Braziller, 1964.
- 図 4: Lasdun, Susan, Victorians at Home, The Viking Press, 1981.
- 図 5-7: Rak, Jiří 他 , Biedermeier: Art and Culture in Central Europe 1815-1848, Jenkins, Lawrence (訳) , Skira, 2001.

[参考文献]

- 川本静子 , ガヴァネス , みすず書房 , 2007.
- Froide, Amy, M., Never Married, Oxford University Press, 2005.
- Ottaway, Susannah, R., The Decline of Life, Cambridge University Press, 2004.
- Vickery, Amanda, The Gentleman's Daughter, Yale University Press, 2003.
- Hughes, Kathryn, The Victorian Governess, Hambledon and London, 2001.
- Logan, Thad, The Victorian Parlour, Cambridge University Press, 2001.
- Kane, Penny, Victorian Families in Fact and Fiction, Macmillan, 1995.
- Smith, Bonnie, G., Ladies of the Leisure Class, Princeton University Press, 1981.
- Broughton, Trev / Symes, Ruth (編) , The Governess, Sutton Publishing, 1977.
- Branca, Patricia, Silent Sisterhood, Croom Helm, 1975.